

# 臼杵端城跡1

うすきはじょうあと  
—臼杵端城跡第1次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1278集



臼杵端城から柑子岳城を見る（東から）

2016

福岡市教育委員会

## 序

海に開かれたアジアの交流拠点都市づくりを目指す福岡市は、大陸文化の受入れ口として古来より繁栄してきました。市内には貴重な文化遺産が数多く残されています。それらを保護し、後世に伝えることは私たちの義務であります。

本市においては、各種の開発事業によって、やむを得ず失われる埋蔵文化財については発掘調査を実施し、記録保存によって後世に伝えるよう努めています。

白杵端城跡が所在する西区今津は中世に開かれた港で、一帯には高名な禅僧栄西ゆかりの誓願寺や、勝福寺などが所在し、北側今津の海岸には国史跡の元寇防塁などもあり、今も中世の港町の面影が残る地域です。

本書は、市道今津3312号線道路改良工事に先立って、平成26年度に実施した白杵端城跡第1次調査の成果を報告するものです。白杵端城跡は今津湾を臨む丘陵上に立地する中世城館で、今回の調査で、今津の湊を監視したと思われる櫓建物や、中国産輸入陶磁器などが出土しました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動に活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者の福岡市西区地域整備部、工事関係者、並びに地元の皆様など、関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井龍彦

## 凡例

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成26年（2014）度に福岡市西区今津地内で実施した発掘調査の報告書である。
- (2) 白杵端城は白杵氏端城という呼称もあるが、本報告では分布地図の名称を採用する。
- (3) 発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は埋蔵文化財調査課、山崎龍雄・同嘱託員の佐々木蘭貞（現独立行政法人九州国立博物館）が行った。
- (4) 遺構実測は山崎龍雄・佐々木蘭貞、遺物実測は山崎が行った。出土遺物の整理・収蔵作業については萩尾朱美が行った。
- (5) 今津海底遺跡表採資料については、福岡大学人文学部考古学研究室所管であるが、資料調査にあたっては、同大学教授桃崎祐輔氏の協力を受けた。
- (6) 本書に使用した図面の浮き書は山崎が行った。
- (7) 遺構・遺物の撮影は山崎が行った。
- (8) 本書に使用した座標系は世界測地系で、使用方位は磁北で、真北から6° 18' 西偏する。
- (9) 出土金属製品の保存処理については埋蔵文化財センター上角智希が行った。
- (10) 土層・遺物の色調の記録については新版標準土色帖を使用した。
- (11) 調査で出土した中世輸入陶磁器の分類については太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡 XV-陶器分類編-」（2000年）を基本にした。
- (12) 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (13) 本書の執筆・編集は山崎が行った。

## 白杵端城跡第1次調査情報

遺跡略号	調査番号	調査地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
UHZ-1	1432	福岡市西区今津地内	204m <sup>2</sup>	25m <sup>2</sup>	道路改良工事	2014.11.10～ 11.27	山崎 龍雄 佐々木蘭貞

## 本文目次

Iはじめに.....	2
1. 調査に至る経緯.....	2
2. 調査の組織.....	2
II遺跡の立地と歴史的環境.....	3
III調査の記録.....	4
1. 調査の概要.....	4
2. 遺構と遺物.....	4
3. 小結.....	9

## 挿図目次

Fig.1 調査区位置図 (1/6,000) .....	2
Fig.2 白杵端城跡周辺の城館と遺跡 (1/50,000) .....	3
Fig.3 今津周辺の字図.....	4
Fig.4 調査区遺構配置図 (1/300).....	5
Fig.5 各トレーナー遺構図と土層 (1/80) .....	6
Fig.6 構建物と柱穴内の石組 (1/80・1/30) .....	7
Fig.7 1トレーナー出土遺物 (1/3・1/4).....	8
Fig.8 2~4トレーナー出土遺物 (1/3).....	9
Fig.9 今津鎌倉山中世火葬墓実測図 (原田大六製図) .....	10
Fig.10 1998年当時の白杵端城跡縄張図 (1/2,000 中西義昌氏作成).....	11
Fig.11 2014年調査時作成の縄張図 (1/2,000 筆者作成) .....	11
Fig.12 堂山城縄張図と櫓状建物 (1/2,000・1/80) .....	12
Fig.13 白杵端城周辺遺跡出土遺物 (1/3).....	17

## 写真目次

表紙 白杵端城から柑子岳城を見る (東から)	
PL.1 (1) 白杵端城跡遠景 (西から) (2) 調査前の現況 (東から) .....	13
PL.2 (1) 1~4トレーナー設置状況 (東から) (2) 1・2・4トレーナー (東から) (3) 1トレーナー整地面 (南から) (4) 1トレーナー整地面 (西から) (5) 1トレーナー基盤面の状況 (西から) .....	14
PL.3 (1) 1トレーナー西壁土層 (南東から) (2) 構建物柱穴内石組 (南から) (3) 構建物柱穴 (南から) (4) 2トレーナー全景 (西から) (5) 北西側平場の状況 (南から) (6) 3トレーナーの状況 (西から) (7) 3トレーナー西壁土層 (東から) (8) 4トレーナー西壁土層状況 (東から) .....	15
PL.4 1・4トレーナー出土遺物、今津海底遺跡採集遺物 .....	16
裏表紙 白杵端城跡発掘作業風景	

## I はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市西区地域整備部土木第2課より西区今津地内で、市道今津3312号線の道路改良工事にかかる埋蔵文化財の事前審査の照会（事前審査番号：26-1-137）が、平成26年9月5日付け西土2第108号で埋蔵文化財審査課に提出された。これを受け申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地、白杵端城跡に含まれるため、現地踏査を行った結果、工事によって遺跡が壊されるおそれがあることがわかった。遺構の保全などについて原局側と協議を行ったが、既に工事計画が進行しており、計画が変更できないことから、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。調査費用については、原局の西区地域整備部土木第2課より令達を受けて、同年11月10日から発掘調査を開始した。調査は11月27日まで実施し、翌平成27年度に資料整理および報告書作成を行った。

### 2. 調査の組織

調査委託 福岡市西区地域整備部土木第2課

調査主体 福岡市教育委員会（発掘調査：平成26年度、資料整理・報告書作成：平成27年度）

調査総括 文化財部埋蔵文化財調査課長：常松幹雄

同課調査第1係長：吉武 学（26年度）、同課調査第2係長 榎本義嗣（27年度）

庶務 埋蔵文化財審査課 管理係長：内山広司（26年度）、大塚紀宜（27年度）

管理係：横田 忍（26・27年度）

事前審査 埋蔵文化財審査課事前審査係長：佐藤一郎（27年度）

主任文化財主事：池田祐司（26・27年度）

文化財主事：福薗美由紀（工事立会調査担当）

調査・整理担当 埋蔵文化財調査課文化財主事：山崎龍雄 埋蔵文化財調査員 佐々木蘭貞

整理・発掘作業員：萩尾朱美、稻富聰、副島勝人、富永遵儀、藤野美津代、松本八重子、森本美智子、山口歎

調査・報告書作成では、埋蔵文化財調査課の清金良太、地元の木下寿一氏、今津海底遺跡遺物の調査では福岡大学教授桃崎祐輔氏他、多くの方々に協力を受けた。記して感謝の意を表します。



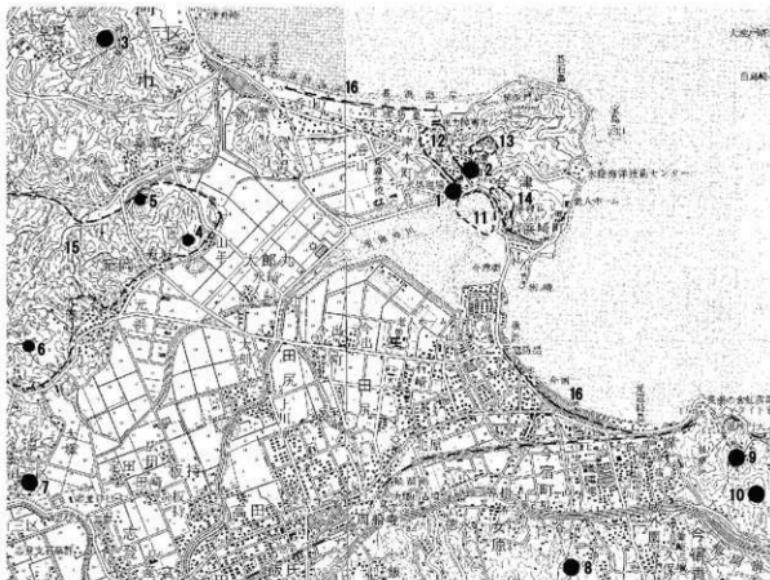
Fig.1 調査区位置図 (1/6,000)

## II 遺跡の立地と歴史的環境 (Fig.1)

白杵端城跡が所在する今津は、瑞梅寺川河口の今津内湾の北側に位置する。この内湾は糸島平野東部を北流する瑞梅寺川が流れ込み、干潟を形成している。白杵端城跡は内湾沿い標高15mの低丘陵上に立地する。今津内湾は干拓が行われた江戸時代以前は、内陸の元闇辺りまで広がっていた。

今津周辺の遺跡は、古くは縄文時代の貝塚が桑原地区や元岡地区で見つかっている。弥生時代は近くに弥生時代の貝塚、今津貝塚がある。今山には石斧生産地として名高い今山遺跡がある。内湾対岸の今宿地区には弥生時代の大集落今宿五郎江遺跡がある。古墳時代は前方後円墳や群集墳が元岡地区的丘陵や、高祖山北麓に多数分布する。古代は製鉄遺跡が元岡・桑原遺跡群にあり、また今山では古代のドッグ遺構が調査され下層より縄文時代の遺跡(註1)が見つかっている。

今津は中世に湊が開かれ、対外貿易港として博多に勝るとも劣らない繁栄を遂げる。今津集落の南側湾内には輸入陶磁器が採集される今津海底遺跡があり、対岸の今津C遺跡では道路建設に伴って、柱穴内に根石を持つ掘立柱建物が検出され、中世の町場の一部が確認されている（註2）。この辺りが湊と推定される。今津は仁和寺を領家とする怡土莊に含まれる。誓願寺や勝福寺が今津の地に開かれ、背後の毘沙門山には多数の子院が造られる（註3）。誓願寺は嘉慶二年（1170）、仲原氏の所願により僧寛智が建立し、榮西が開基。榮西は仁和寺領備前吉備神社社家の出で、仁和寺と深い関わりを持つ。勝福寺は臨濟宗大徳寺派で、建長元年（1249）、蘭渓道隆の開基で、後に怡土莊が大仏氏（北条一門）



1.白杵城跡 2.鷲城跡 3.柑子岳城 4.水崎城 5.大神城 6.元岡峰城 7.泊城 8.青木城 9.鉢庭城(油坂)  
10.長垂城 11.今津海底道路 12.今津A道路 13.今津B道路 14.今津C道路 15.元岡・桑原道路群 16.元寇防堤

Fig.2 白杵端城跡周辺の城館と遺跡（1/50,000）

の支配になり、大仏氏の祈祷所となる。戦国時代は大内氏と結びつく。また今津北側海浜には元寇防塁（石築地）があり、大隅・日向両国の分担で築かれた。また異国警護役とし派遣された千葉氏（註4）は大隅国守護で、今津に地頭職を持っていた。臼杵端城（別称：臼杵氏端城）は江戸時代の編纂資料『筑前国続風土記』に見られる城跡で（註5）、臼杵という名前から大友氏との関わりが考えられるが、大友氏が志摩に進出するのは、元寇の恩賞として志摩郡の地頭職を得た後である。周辺の城館としては今津には鷺氏の鷺城がある。

### III 調査の記録

#### 1. 調査の概要 (Fig.1~4、PL.1)

今回は丘陵上に立地する城郭の調査なので、工事範囲内の作業が可能なスペースに、安全に配慮してトレンチ状の調査区を4か所設定した。調査は表土掘削から人力作業で行い、目に付く遺物すべてを取上げた。また並行して城の縄張図作成も行った。南側進入路工事についての工事立合は調査終了後、事前審査担当に依頼し、ピット2基を検出した。出土遺物はコンテナ6箱出土。時期は中世～近世まで含む。遺物は小片が多いが、出来るだけ図化につとめ、全形を復元している。

#### 2. 遺構と遺物

##### ① 第1トレンチ (Fig.5~7、PL.2・3-1~3)

主郭部に北東縁に設定したトレンチ、面積は13.2m<sup>2</sup>を測る。遺構面までの層位はFig.5の通り。深さ40cmほどで基盤整形時の礫石混じり粘土の整地面を造る。遺構は整地面上で検出した。この面は焼土、炭化物が広がり、火災を受けたような痕跡を示す。当地点にはない河原石なども固まって出土した。断定はできないが、合戦時の石礫の可能性を考える。検出した遺構は主に柱穴、同じ主郭の4トレンチで検出した柱穴と合わせて1×1間の建物となる。

1号建物 (Fig.6) 1トレンチのSP03・06と、4トレンチ SP405の3基の柱穴で構成する横長の1×1間の建物。あと1基の柱穴は西側調査区外にあると推定する。長軸長3.97m、短軸長2.40m、柱穴径約0.8m、深さ0.5~0.8mを測る。大きく深さもあり、高層の建物と推定する。SP03には礫石が流れ込み、SP04内北側には根固めの石組があった。出土遺物としては2~4がある。今津内湾を見下ろす場所にあることから、監視を目的とする櫓建物の可能性がある。類例として築城町の堂山城で見つかった櫓跡 (Fig.12・13、註6) を紹介する。規模は臼杵端城跡よりやや小さい。



Fig.3 今津周辺の字図

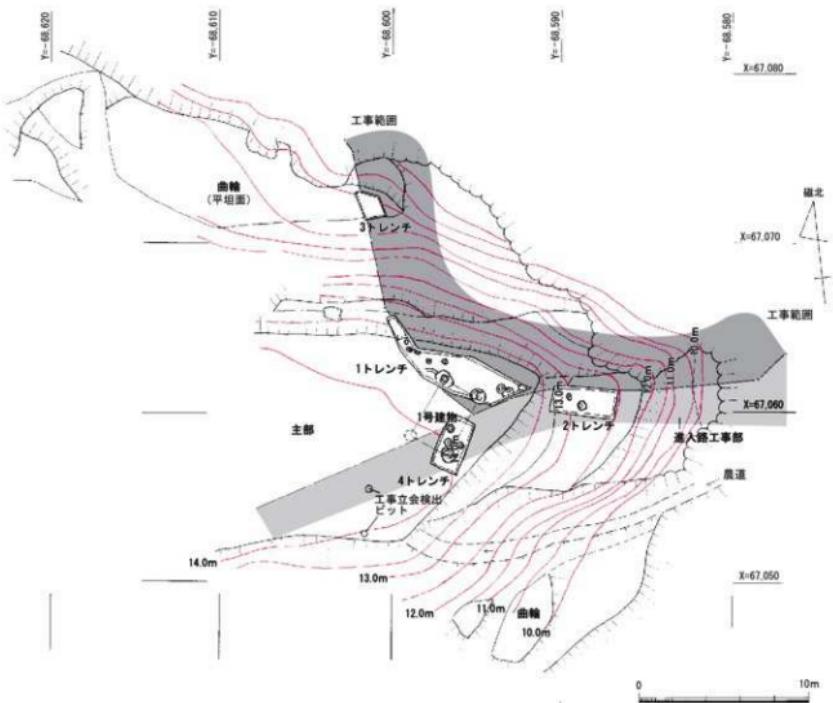


Fig.4 調査区遺構配置図 (1/300)

出土遺物 (Fig.7、PL.4) 1は炭化物集中部のSX02出土。青磁碗口縁部細片。釉色、口縁部の傾きから16世紀頃の中国龍泉窯系碗か。2は建物柱穴SP03礫石下出土。白磁碗V類口縁部細片。3・4は建物柱穴SP04出土。土師器の小型化した环。3は1/12片で推定口径11cm、器高2.1cm。色調は灰黄色。4は口縁部小片。外底部回転糸切り。色調は明赤褐色。いずれも外底部回転糸切り。5はSP06出土の土師器环1/5片。口縁部先端を欠くが、推定で約11cmか。摩滅し調整は不明。色調は明赤褐色。6はSP10出土。土師器环の細片。外底部回転糸切り。色調は純い橙色。7は表土採集。明の染付碗か皿小片。見込みと外面に異須による文様がある。8~15は第2層暗褐色土 (-0.2~-0.4m) 出土。8~11は土師器。8・9は小皿。8は1/6片。復元口径8.2cm、器高1.6cm。9は1/8片で復元口径8.6cm、器高1cm。摩滅し調整は不明。いずれも色調は純い褐色。10・11は小型の环か皿。10は口縁部先端を欠く1/6片。11は大きく開く口縁部1/7片。復元口径11.5cm。摩滅し調整は不明。8・10の外底部は回転糸切り。12は大きく外反する口縁の白磁皿。16世紀代中國景德鎮窯系の白磁皿。13は白磁口縁部片。傾きから皿であろう。14・15は龍泉窯系青磁。14は蓮弁の小碗1/10で復元口径10.8cm。色調は緑がかった純い褐色。15はI類碗高台部小片。16・17は第2層下層 (-0.25~-0.5m) 出土。16は純い黄色釉の施釉で陶器に近い感じ。口縁部内面に白粘土の圓線があり、朝鮮王朝のものか。17は白磁蓋1/8片。色調は灰白色、釉の発色は良い。18~27・35は整地面砂礫層上面。18は小皿1/8片。復元口径10.6cm、

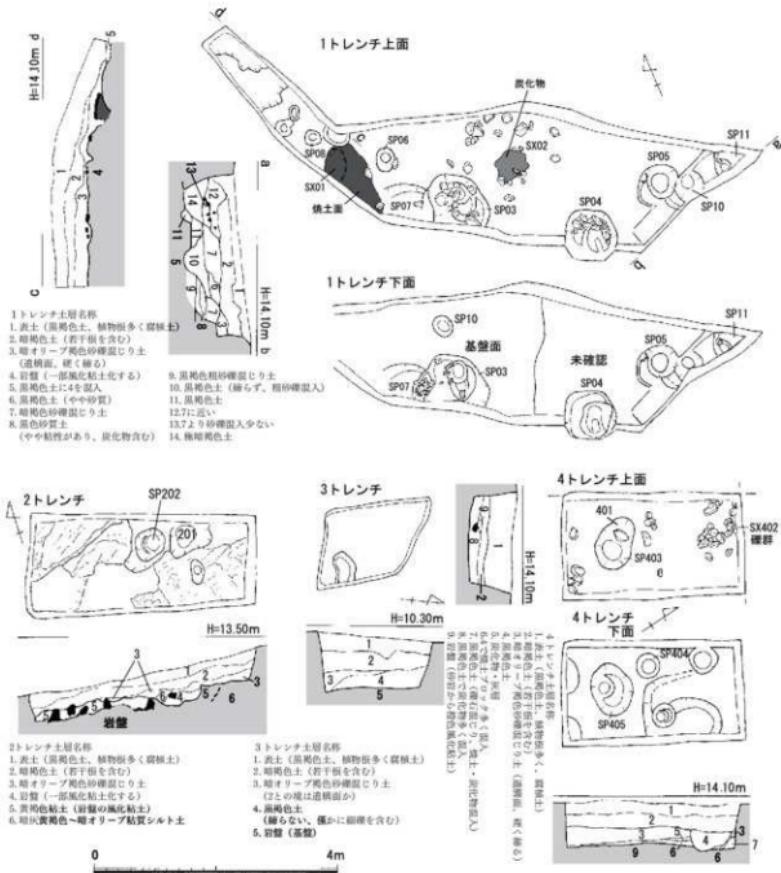


Fig.5 各トレンチ遺構図と土層 (1/80)

器高1.9cm。器壁は摩滅が進む。色調は鈍い赤褐色。19は小型の坏か。1/6片で復元口径11cm。色調は明赤褐色。20は坏の細片。色調は明赤褐色。21は底部片で口縁部一部残る。復元口径13cm弱、器高2.8cm。色調は明赤褐色。18~21は摩滅が進むが、外底部は回転系切り。22~24は青磁。22は碗口縁部細片。暗オリーブ色軸がかかる。23は小碗III類底部1/2弱片。厚めのオリーブ灰色軸がかかる。24は皿口縁部細片。緑灰色軸がかかる。25は土師器捏鉢口縁部細片。内面細かい横ハケ目。26は管状土鍾。全長4.5cm、最大径1.2cm。孔径約3mm。27は土鍾状で孔はない。残存長3.6cm、最大径1.2cmを測る。端部が縫れ、そこで糸を縛ったのかも知れない。表面は摩滅するが、指押え仕上げ。色調は鈍い赤褐色。胎土は精良。35は整地面上に散布する砾石。表面が擦られ、平滑な感触がある。長さ16.2cm、幅14cm。安山岩のような火成岩系石材である。石疊などに用いられたのか。28~31は整地面砂疊土出

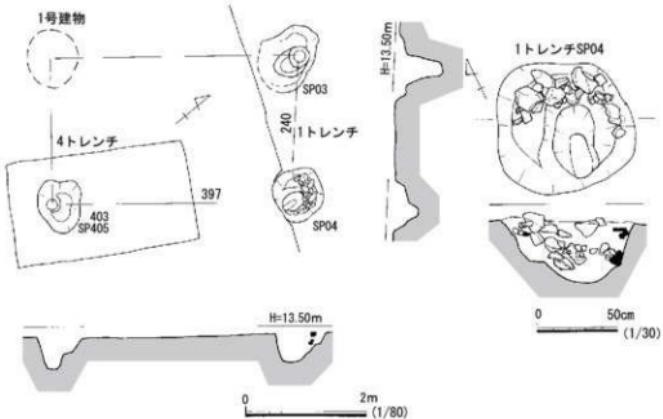


Fig.6 棚建物と柱穴内の石組 (1/80・1/30)

土。28~30は土師器。28は小皿。1/8片で復元口径8.6cm、器高1.0cm。器壁は摩滅し調整不明。色調は鈍い褐色。29・30は壺。29・30は1/6片で復元口径は13.2cm・12.8cm、器高は2.7cm・2.7cm。いずれも器壁は摩滅するが、29の外底部は回転糸切り。色調は鈍い褐色。31は同安窯系青磁皿1/3片。復元口径10.6cm、器高2.7cmを測る。内面ヘラ切りと櫛目の文様。色調は灰オリーブ色を呈す。32~33は東壁サブトレンチ内出土。32は土師器の皿細片。33は備前陶器插鉢IV類の口縁部細片。調整は回転ナデ。色調は黄灰色。34は1トレンチ北東隅壁際出土。龍泉窯系青磁碗1/10片。復元口径15.2cm。灰オリーブ色釉がかかる。16世紀のもの。

### ② 第2トレンチ (Fig.5・8, PL.2-1, 3-4)

主郭東側一段下がった平坦面に設定したトレンチ。調査面積は6.08m<sup>2</sup>。岩盤の基盤面をやや下傾するが整形している。層序は上から第1層表土10~20cm、第2層暗褐色土、第3層暗オリーブ砂礫混じり土（整地面か）、基盤面となる。基盤面は所々風化し、粘土化している。検出した遺構は柱穴1基。直徑40cm強で、深さは約70cm。上層に礫石が2個あった。

出土遺物 (Fig.8) 36は表土上層出土。近世陶器細片。近世後期の高取焼系と思われる。37は柱穴横の落込み201から出土。不明鉄製品で残存長5.8cmを測る。鋒がひどいが、木質が全面に残る。断面は長方形に近い方形。釘に近いものか。

### ③ 第3トレンチ (Fig.5・8, PL.2-1・3-5~7)

主郭北側一段下がった平坦面に設定。菱側に近い形で、調査面積1.8m<sup>2</sup>を測る。層序は第1層表土20~30cm、第2層暗褐色土20~30cm、第3層暗オリーブ褐色砂礫混じり土（整地面）、岩盤（基盤面）となる。斜面を削って平坦に仕上げる。整地面のみで明瞭な遺構は不明。

出土遺物 (Fig.8) 近世のものが少量出土、直接城に結びつくものは無かった。38は表土上層出土。瓦質土器で線香立てのようなものか。外面は丁寧な研磨仕上げ。色調は黒色を呈す。

### ④ 第4トレンチ (Fig.5・8, PL.2-1・2, 3-8, 4)

第1トレンチ南側のトレンチ。第1トレンチで検出した建物と予想される柱穴を確認するため設定

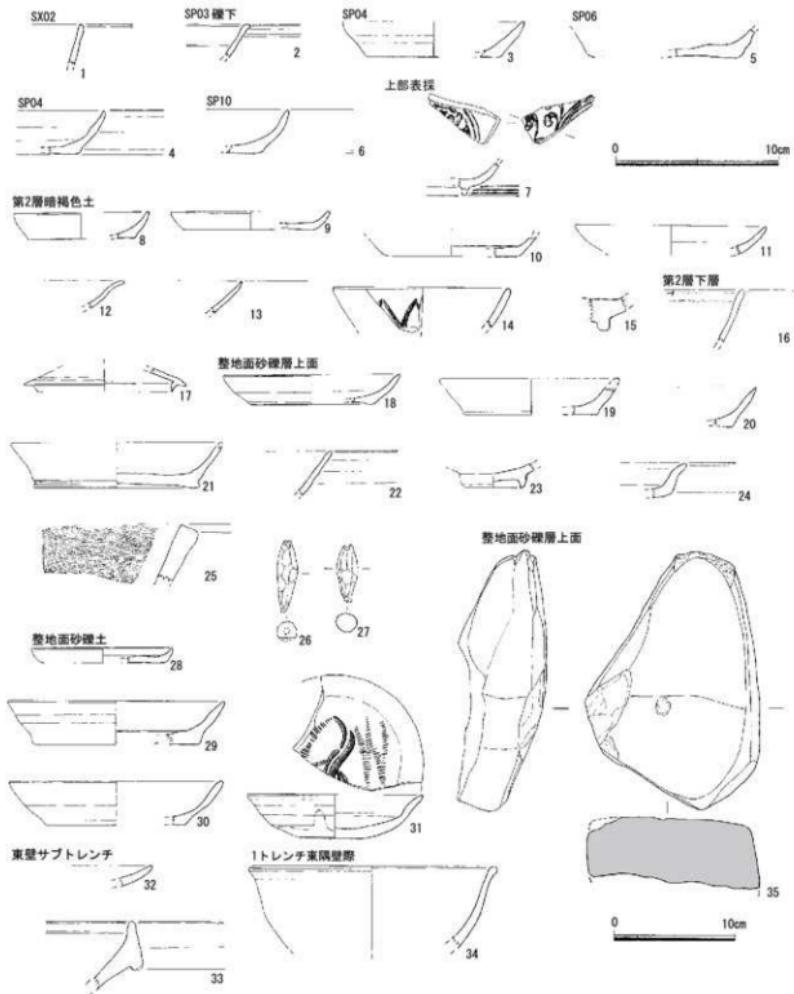


Fig.7 1トレンチ出土遺物 (1/3・1/4)

した。調査面積は3.5m<sup>2</sup>である。基本層序はFig.5の通り。第3層が整地層で、その上面で遺構を検出した。整地面上には焼土塊・炭化物が全面に広がり、北隅に径10~20cm程の礫が集中する。1号建物の柱穴はトレンチ南側中央で検出した。柱穴は不整形な形状で、柱が抜かれたのかも知れない。整地面の調査のあと、基盤面まで掘下げ、ピットを検出した。

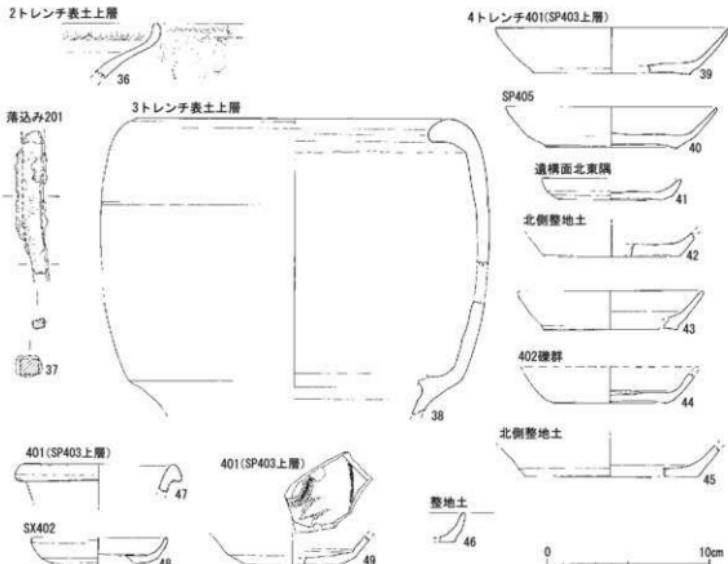


Fig.8 2~4トレンチ出土遺物 (1/3)

出土遺物 (Fig.8, PL.4) 39~46は土師器で外底部は回転糸切り。39は北東側401 (SP403上層) 出土。环1/12片で復元口径14.2cm、器高2.8cm。体部は横ナデ。色調は明赤褐色。40は1号建物柱穴SP405出土。环で口縁部1/4が残る底部片。復元口径12.8cm、器高2.5cm。体部調整は横ナデ。色調は明赤褐色を呈す。41は造構面北東隅出土。小皿1/4片で復元口径8.4cm、器高1.3cm。色調は橙色。摩滅し調整不明。42・43は北側整地土出土の小型の环。42は底部1/4片。摩滅し調整は不明。43は1/6片で復元口径11.2cm、器高2.4cmを測る。体部はヨコナデ。色調は明赤褐色、鈍い褐色。44は碟群402中出土。皿か小型の环底部1/4片。45は北側整地土中出土。环底部1/8片。摩滅し調整不明。色調は橙色。46は整地土出土。小皿細片。色調は灰褐色を呈す。47・48は白磁。47は401 (SP403上層) 出土の壺口縁部1/4片。明オリーブ褐色釉がかかる。48はSX402出土の皿と思われる1/4片。復元口径8.2cm。光沢を持つ灰白色釉がかかる。49は401 (SP403上層) 出土の同安窯系青磁皿1/4片。見込み櫛目文様を施す。オリーブ灰白色釉がかかる。

### 3. 小結

狭い範囲の調査であったが、臼杵端城（別称：臼杵氏端城）がしっかりと造構を持つ城跡であることが判明した。工事立会いでもピットを検出しておらず、主郭全域に造構が存在すると思われる。造構の時期については数少ない遺物から見ると、31・49の中国同安窯系青磁、47の中国産白磁壺などが12世紀代からのもの。新しい時期は近世の36や38を除けば、7の明代染付、12の白磁が16世紀頃、33の擂鉢が備前IV期で14世紀以降であり、土師器环・小皿については、山本信夫氏の土師器編年（註7）に照らせば、底部が回転糸切り離して12世紀中頃以降のもの。环の法量や形態は、いずれ

も小型の割に器高が高く、体部の開きが大きいという傾向を示し、土師器編年のIX類以降、13世紀後半以降に該当すると思われる。青磁は14の小碗で、大宰府の輸入陶器分類の蓮弁の簡略化IV類の形態から14世紀以降、23のIII類の形態は13~14世紀以降である。以上から勘案すれば、白杵端城は13世紀後半頃から始まり、16世紀末頃まで存続していたものと推定する。

白杵端城跡の性格を考える上で手掛かりとなる、隣接する今津海底遺跡の資料を紹介する。福岡大学人文学部考古学研究室が所蔵する採集資料 (Fig13、PL4) を同学部教授桃崎祐輔氏のご好意で一部を実測出来た。いずれも1980年代~2007年までに表採されたもので遺物の残りは良い。表面はやや塩を吹く位で、殆ど摩滅を受けてなく、水生生物の付着痕もない。干潟の泥土に埋まっていたせいであろう。1・2は土師器。1は小皿1/片、復元口径9.6cm、器高約1cm。XVI類で12世紀末から13世紀前半。2は坪1/4片、復元口径13.4cm、器高2.7cm。外底部は回転糸切り。法量からXVII期で、13世紀頃。3は瓦器椀底部1/4片弱。瓦器椀使用の後半期のもの。4・5は白磁。4はIV類で11世紀後半~12世紀。5は大型の碗か鉢の底部である。6・7は龍泉窯系青磁碗底部。I-1a類か1b類。6の表面は白っぽくなっている。7は高台内面重ね焼きの粘土が付着する。12世紀中頃~後半。8は龍泉窯系青磁小碗III-2c類。13世紀中~14世紀初頭。9は青磁皿1/5片。復元口径10.4cm。I-2a類で、12世紀中頃~後半。10は明代の染付。基筒底の底部で、釉色、胎土の性質から中国南方産と思われる。11は陶器壺口縁部1/6片。胎土から磁灶窯系か。12は盤I-2b類。復元口径26.6cmと小型である。磁灶窯系か。13世紀頃のもの。13は青磁碗底部を再利用した瓦玉。高台の形態から同安窯系であろう。以上は12世紀~16世紀頃までの遺物であり、白杵端城の時期に並行する。両者は密接に関わりがあると考える。14は参考であるが、毘沙門山山麓の今津B遺跡の試掘資料 (註8) である。16世紀代の明の赤絵皿（釉が剥がれてるので五彩の可能性もある）である。

白杵端城は内湾を臨む丘陵東端に櫓があることから、港を管理する機能を持つ丘陵上に築かれた館城と考える。白杵端城の縄張りの説明は紙面の都合で省くが、白杵端城跡縄張図 (Fig.10・11) を上げておく。規模は東西長90m以上を測るが、西側斜面を中心に周囲はかなり地形改変を受けている。昭和31年、既に消滅した城の西端で、当時今津在住の考古学者原田大六氏が鎌倉山火葬墓 (Fig.9) を

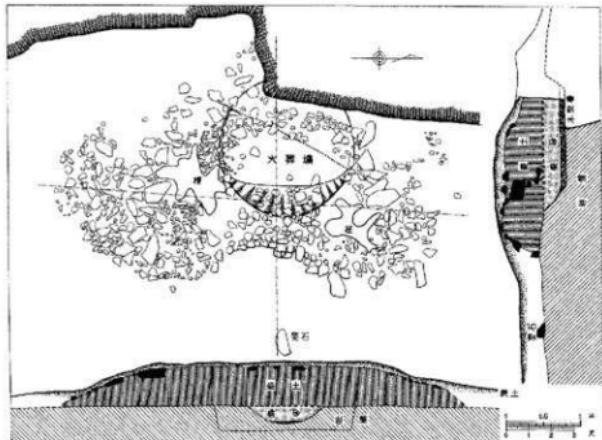


Fig.9 今津鎌倉山中世火葬墓実測図 (原田大六製図、註9)

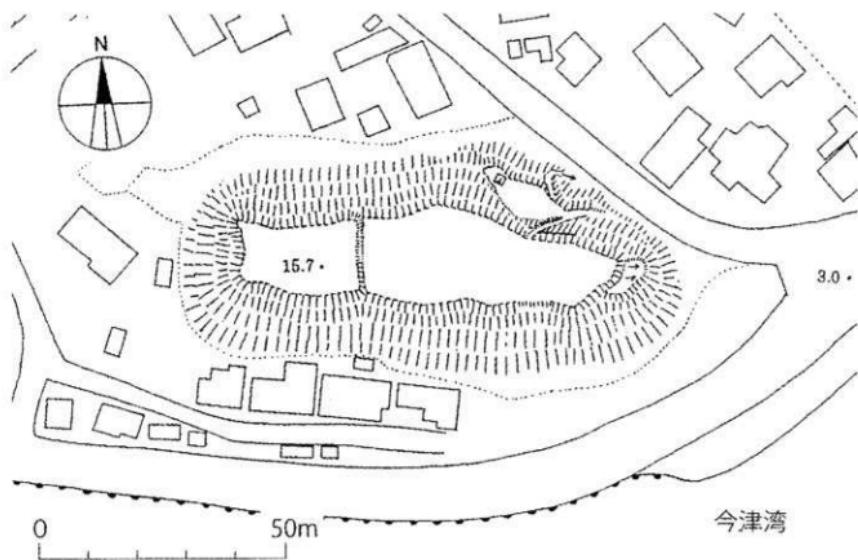


Fig.10 1998年当時の白杵端城跡縄張図 (1/2,000 中西義昌氏作成)

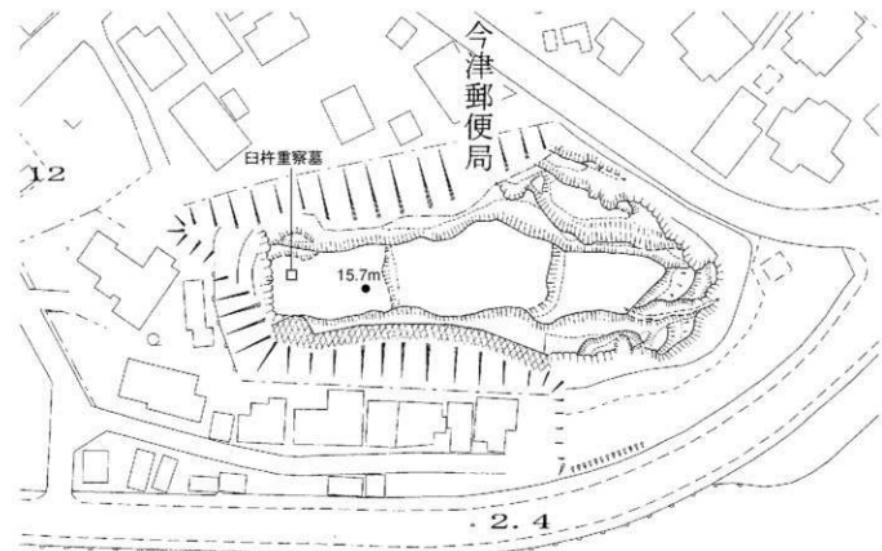


Fig.11 2014年調査時作成の縄張図 (1/2,000 筆者作成)

調査している、当時地元でこの丘を鎌倉山と呼んでいたことを示す。白杵端城が鎌倉時代からあった証拠の一つとなろう。調査で確認した焼土・炭化物の散布から、白杵端城が戦火に見舞われたこともあったことを示す。城主としては鎌倉時代から室町・南北朝期は、今津に地頭職を持っていた千葉氏と深い関わりがあり、大友氏がここを管理するのは志摩郡を一円支配する、戦国期以降であろう。

#### 註

- 註1 福岡市教育委員会「今山遺跡—第8次調査—」福岡市埋蔵文化財調査報告書第835集 2005年
- 註2 福岡市教育委員会「福岡市埋蔵文化財年報Vol.4 1989年度」1991年
- 註3 賢順寺は真言宗仁和寺派の寺で、最盛期は毘沙門山山麓に42の子院を構えた。現在は大泉坊のみ残る。
- 註4 千葉氏は関東の下総国出身の御家人。元寇の際、異国警護役として九州に派遣され、肥前国小城と筑前国今津の地頭職を持ち、千葉氏内紛後、一族の千葉僧宗胤が肥前國に土着し、肥前千葉氏となる。
- 註5 貝原益軒編『筑前国続風土記』(1688-1709年作成)の巻28「古城古戦場」志摩郡の項には「白杵端城 今津の西にあり。大友の臣白杵重察か邑城なり」という。其所に重察か墓あり」と記されている。
- 註6 現築上町にある山城。1998年度調査。築城町教育委員会「堂山城址」築城町文化財調査報告書第7集 1999年
- 註7 山本信夫「統計上の土器—歴史時代土器の編年研究によせて—」『九州上代文化論集』乙益重隆古希記念論文集 1990年
- 註8 1985年度実施の今津B遺跡第1次調査(市報166集:1987年)の試掘調査時出土した遺物。未報告分。
- 註9 糸島市伊都国歴史博物館『原田大六展図録』2010年

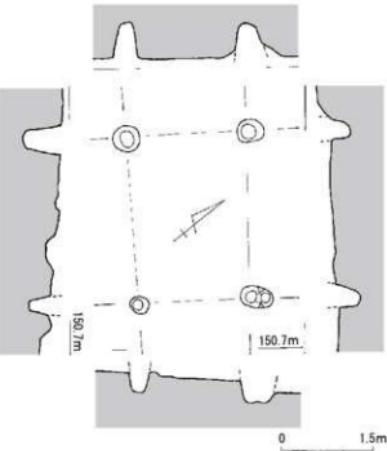


Fig.12 堂山城縄張図と櫓状建物（縄張図は1/2,000、建物は1/80）



(1) 白杵端城跡遠景（西から）



(2) 調査前の現況（東から）



(1) 1~4トレンチ設置状況（東から）



(2) 1・2・4トレンチ（東から）



(3) 1トレンチ整地面（南から）



(4) 1トレンチ整地面（西から）



(5) 1トレンチ基盤面の状況（西から）



(1) 1トレンチ西壁土層（南東から）



(2) 檜建物柱穴内石組（南から）



(3) 檜建物柱穴（南から）



(4) 2トレンチ全景（西から）



(5) 北西側平場の状況（南から）



(6) 3トレンチの状況（西から）



(7) 3トレンチ西壁土層（東から）

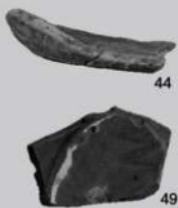


(8) 4トレンチ西壁土層状況（東から）

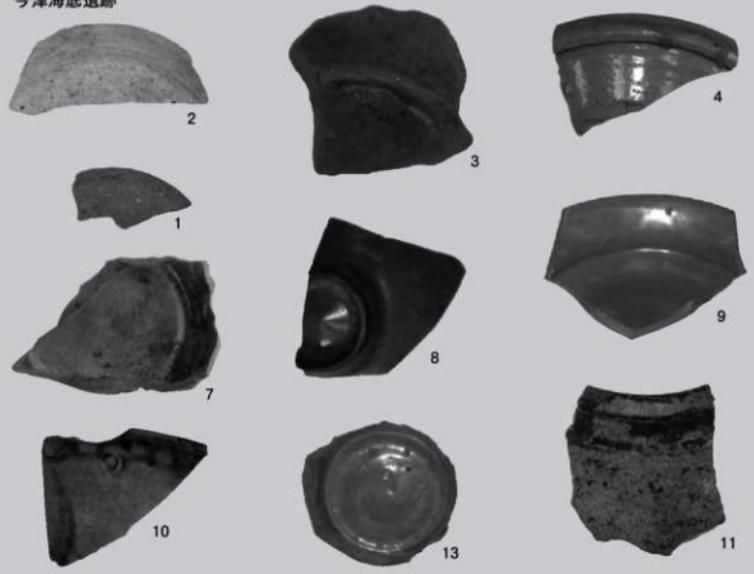
1トレンチ



4トレンチ



今津海底遺跡



1・4トレンチ出土遺物、今津海底遺跡採集遺物（縮尺不統一）

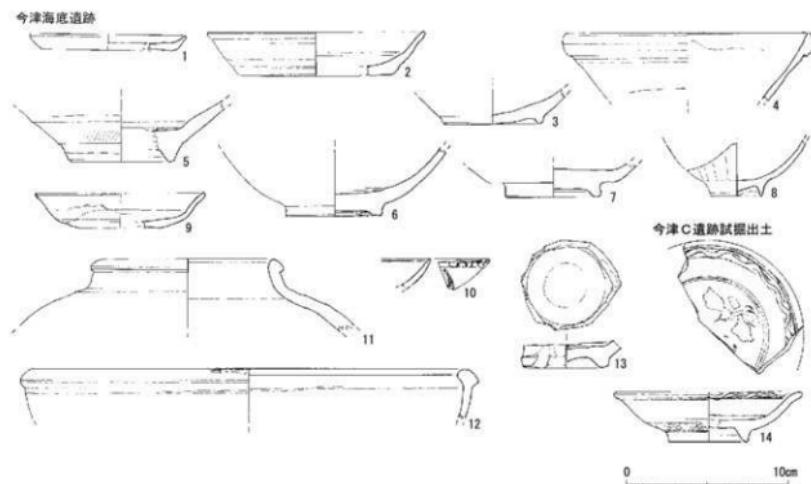


Fig.13 白杵端城周辺遺跡出土遺物 (1/3)

報告書抄録

ふりがな 書名	うすきはじょうあと						
副書名	白杵端城跡1						
卷次	第1次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1278集						
編著者名	山崎龍雄						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667						
発行年月日	西暦2016年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
白杵端城跡 第1次調査	福岡市西区今津地内	40135 0054	33度33分 44秒	130度20分 5秒	2014.11.10 ~ 2014.11.27	25	道路改良
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
白杵端城跡 第1次調査	城館	中世	掘立柱建物、ピット	中世土師器・輸入陶磁器			
要約	丘陵上に立地する城館の調査。丘陵東側先端部の調査で、1×1間と思われる構建物を検出した。周辺は焼土や灰、人頭大の礫が散布しており、戦いが行われた痕跡がある。						



臼杵端城跡発掘作業風景

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1278集

## 臼杵端城跡1

-臼杵端城跡第1次調査報告-

平成28年3月25日

発行 福岡市教育委員会  
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 城島印刷株式会社  
福岡市中央区白金2丁目9番6号